

## 新刊紹介

### 恵心尼文書の研究

鷲尾 教導著

鷲尾氏の有益なるこの研究が發表せられてから自分は數回本文書を読み返して、さうも意味の通じない所が多いので、素人ながら寫眞版と對映してみても、かう讀みなほしたらさうかと思ふ點を記録しておいた。その後、中外日報に岩橋小彌太氏の訂正意見が發表せられた。これによつて大いに讀みよくなつたわけであるが、まだ／＼不明な點がある。今僕は「かう讀んだ方が正しいのではあるまいか」と思ふ點を次に記して鷲尾氏並に大方の叱正を仰ぎたい。(岩橋氏の擧げられたのと同じ分は省く)

#### ○圖版第一

- (1) 第六行 ま<sup>△△</sup>つれ(繼連) まさ<sup>○○</sup>おんな(政女カ)  
(2) 九行十行 おのみ<sup>△△</sup>(己の躬) おのこ<sup>○○</sup>(男の子兒)  
(3) 十一行 おん<sup>△△</sup> 下人

圖版第一のみは鷲尾氏の影寫を寫眞にされたもので少しく不明な點が多いが、(1)は圖版第二の十行「又まさおんな……」に、(2)は圖版第五の十七行「おんなここのこ」に比較して右の如く改讀さるべきでは

あるまいか。(1)を「まさおんな」こよんで「こそ下に」已上合おんな六人おまこ一人七人也」といへるに合致する。従つて「研究」七七頁の對照圖も訂正せらるべきである。影寫ではこても「まさおんな」は讀めないけれども、原本は圖版第二の如くなつてゐるだらうと思像する。(2)は「おのこ」と讀んで、「けさ」の子は十六の「なこし」と九ツの娘と二人の外に今年三つになる男兒があるがそれは人の下人具して産んだのだからその父親に取らせたさいふ意味であらうと思ふ。(3)は圖版第十の十二行と共に「おん」ではなく「下人」であるまいか。

#### ○圖版其三

- (4) 三行 にさんち<sup>△△</sup>(二三日) かさ心ち<sup>○○</sup>(風邪心地)

これは二三日では薩張りわからぬ。「かざ心ち」とよめば、十四日の正午頃から風邪氣分で、その夕方から寢られたこゝになつてはつきりする。

#### ○圖版第四

- (5) 十行 か<sup>△△</sup>せ かぜ<sup>○○</sup>(風邪)

(6) 圖版第四と第五とは、も離れてゐたのを「内谷から判じて」一聯にして(一六三頁の説明)あるが、これは時は同時かも知れぬが第五は第四の後半をみるわけにはいくまい。第四は末行の「……まいらせぬ

事こそ」から紙の右端の「心もさなくおほえ候……」へ連聯し「二月十日」の日附で結末なるものに違ひない。第五は「こそ」のつくりもの云云「こある」「こぞ」は弘

長三年の飢渴の前年なる弘長二年を想像すればこの狀は第四と同じく弘長三年の手紙であらうが第四の後半をみるべき決定的理由はないやうである。序ながら第四通の「このもん」は前の第三通をさすもので、第四は第三の覺え書に附した送り狀のやうな形になるものであらう。そしてこれはあまり想像にすぎないだらうが後の第六通の端書の「このもん」をいふのも、第四に於ける第三の如く第六通に對して外に、所謂「御しけんのもん」をかけた別記があつたのではあるまいか。

○圖版第七

(7) 端書第一行 殿へ殿の

(8) 本文第一行 □ 同

(7) は同じく本文第三行の「殿之」を同筆勢と見えるからである。

○圖版第十

(9) 十二行 おんぎも 下人ぎも

○圖版第十一

(10) 七行 はたぐくも はるぐくも (遙々)

雪)

(10) のたの字は次行の「よそなる」のるの字と比較してゐる。こし、「遙々」雪のよそ(外)なる様にて」を解するのは無理だらうか。

○圖版第十二

(11) 十四行 こゝろさし(志) こゝろさし(殺さじ)

(12) 端書二行 三行 やかたにはせ(屋形に馳せ) や

しなはせ(養はせ)

(12) のしと見たのは本文十一行の「したかひて」のしの字と同じ筆勢と思ふから。小鳥が子がないので七つになる女童を養ひ子にしたそれが親の小鳥と一緒にそれへ參るこいふ文意かと思ふ。

○圖版第十三

(13) 十五行 ひもしし(の)のしし(の)の(歳死)

○圖版第十四

(14) 十五行 たりならん たしか(確)ならん

○圖版第十六

(15) 九行 よの 上の

(16) 二十一行 たり□ たしか(確)(な)

(16) を岩橋氏は「たより」を訂正せられたが、僕は(14)と同じ意で「たしか」をよみ虫損の所になの一字があつたものと想像した。このたしかの字で想ひ出したが圖版第二の右端書

(17) 第一行「いつもりこ」を讀み、いつもりを人名に索引にしてあるが、これも「いつもがこ」で「出雲」といふ人名ではあるまいか。

以上全くの素人見故頗る的是な専門の知識を以てみれば噴飯にたへぬことをいつてをるであらう。謹んで叱正を乞ふ。(布装菊判圖版二十一、一七三頁價三〇〇中外出版社發行)(櫻部文鏡)

### 唯識二十論の對譯研究

佐々木月樵著

著者等は、大乘佛教研究の一部として、先づ論部諸本をテキストロジカルに研究して、その内容思想の究尋を徹底せしめると共に、漢譯諸本の對比、梵本・藏譯の有無を探りてその對校をなし、之を對譯大乘論大系でもいふべき名のもとに漸次に出版せんことを企圖せられた。今その第一として世觀の二十唯識論が出たのである。この著は三部より成る。(一)唯識二十頌論序説これは世親傳略等の六項四十四頁に亘りて佐々木教授が「本論の要旨と組織をを紹介」せられたものである(二)漢藏對譯唯識二十頌論。これは漢譯三本(イ後魏瞿曇般若流支・ロ陳真諦・ハ唐玄奘)と藏譯を上下四段に排列印刷し、諸譯本の文々句々を分節照應せしめてある。これ正しくこの著の成果であつて、この諸譯の嚴密なる對照と、漢譯に施した句讀訓點こそは著者

の妙からぬ苦心の存する處である。(三)唯識二十頌論注記。これは漢譯三本と藏譯との對校を進めらるゝ間に接觸せられた問題について、その分擔者山口益氏が梵藏兩語の知識を傾けて執筆せられたものである。本論の梵文原典は不幸にして傳らないのであるから、梵文の直譯として學者の嚴密を認むる藏譯によりて漢譯諸本の本文批評をなし、翻譯の優劣を論じ文句の出沒を究め、訓み方を決定し、進んで本論に示されたる世親教學に就ての從來の論議に對しても及ぶ限りの解明を試みてある。一方又漢譯によりて藏譯そのものゝ寫誤脱漏をも訂し、苟くもテキスト上の疑點あらば學的良好心を裏切らずして考證と提議とに努めたものである(四)に Poussin 氏すらも未だ參照せられなかつた處の Vinītadeva の疏釋を詳細に參考せられたことは特筆すべき功績である。若し夫れ第十一偈の下、和合和集についての研究、第十八偈の下夢覺二人が夢時覺時がついての考への如き執筆者獨自の論議である。こもあれこの種の研究出版は疾くに出づべくして未だ出でざりしもの。せめて代表的經論だけでも早くかくの如き形式での出版完成を期することは學徒の任でなければならぬ。この著校正嚴密なりと雖も猶二三の誤植あり又たこへば漢譯には別行の頌なきを藏譯の別行頌と對

照する爲に別出したることを明にせず、従つて漢譯題號撰號の位置等に不自然を來したる如き遺漏全くなきにはあらねど、内容、形式共に學界に推すべきものと思ふ。卷末二種の索引も亦斯學に志すものを裨益すること甚大である。(布裝特型四六倍判一八〇頁價三・八〇京都内外出版社發行)(櫻部)

## 龍樹の宗教

加藤 智學著

著者が内題にも云はれてある通り「龍樹の宗教」は、「淨土教の祖聖としての龍樹菩薩とその宗教」てふ意味の著作である。第一篇は「龍樹菩薩」を題して最初に「淨土の三經」の節を掲げて三經所説の意義を略述して次で龍樹菩薩の出世から滅後に至るまでの傳説を極く一般的に叙し來り終りに「安樂國に往生す」の節に至つて楞伽經の懸記を出して、無上大乗の眞宗は釋尊の血であると共に龍樹大士の髓である今や大士は無量光明の淨土に往生せられたと述べて、龍樹大士の志念の歸趣を知らしめ、最後に我等は須らく念佛成佛の大道に入りて深く教主教祖の聖意を汲まなければならぬこの意味を述べて最初の「淨土の三經」の節を設けた意義を結んで居られる。第二篇に於ては「龍樹菩薩の宗教」を題して廣汎なる龍樹菩薩の著述中より大士の宗教に關する文を引用し、之を百三節に分類して、以て龍樹菩

薩の宗教思想が如何に表現されてゐるかを示されてある、加之、いやくも大士の宗教思想を助成したる經典即ち華嚴、般若、無量壽經等の聖文をも引用して以て大士の宗教の深き傳燈を明瞭にしてある。第三編には「後代諸師の讚釋」を題して重にも淨土教の諸師が龍樹大士を讃仰せる釋文を集録して、龍樹菩薩の宗教思想が如何に後世發展し、如何に後世の諸師の宗教に影響してゐるかを暗示してある。以上第二第三の兩篇に於て全く引文のみに止まつて著者の私見私語が全く加えられてゐない所に、著者の敬虔な態度が窺はれるのである。最後の第四篇には「解説」を題し爰に於て上記三編に涉つての著者自身の斷片的な研究が發表されてある。これ等の研究發表は研究の對象や研究の方法等を著者と同一くする人々は大に指針とならうと思ふ。

之を要するにこの著作は研究だといふよりも寧ろ一般的に淨土教の祖聖としての龍樹菩薩の宗教を紹介せんためが恐らく著者の意志であらうと思はれるから、この意味に於て龍樹の淨土教思想を概括的に知らんとする人達には是非とも讀まなければならない好著である殊にかういふ方面の著書の少いことであるから、かうした著作をものされた著者の勞を謝さねばならぬ次第

である。(四六版五一四頁大正十二年十二月法藏館發行  
價金參圓)(M)

## 佛傳集成

常盤 大定編著

第一章 本行篇。第二章 太子篇。第三章 求道篇  
第四章 說法編。第一節 避方教化。第二節 釋化  
教團。第三節 諸大弟子。第四節 隨器開導。第五  
節 應病與藥。第六節 有爲轉變。第五章 涅槃篇  
本書の構成は、其表題及序文に表されて居る如く、十  
數年を要して、原始諸經典より後期諸經典に到る數多  
の經典中に散存せる釋尊の記錄を、博士の「一切の私  
意を抜き去つて」、忠實に和譯意譯交錯せしめて、配列  
組織されて居る興味多き「集成」佛傳である。

顧るに、佛入滅已來二千數百年其間佛教々學の進展  
を見るに雖も、未だ完全なる考證に基ける佛傳の一さ  
へ出版されたる事なく「一切の私意」から脱却せざる杜  
撰なるものの外に發見し得られざる時に、本書が諸經  
典に散存せる釋尊の記錄を、そのままに抄録し以て讀  
者の眼に因つて佛の人格を把握せしめんとしたる事は  
首肯すべき點であらう。固より生涯に於ける事實を追  
ふものが眞の傳記であり歴史であつて、單なる藝術的  
表出がそれでない已上、佛傳の構成に於て殊に後期大  
乘諸經典に於ける藝術的表出を主として取るべからざ

るや明である。此點に於て博士の集成佛傳に於てその  
太子篇已下佛陀の事實的記錄の諸篇が、主として原始  
諸經典及律文に依つて表されて居る事は尤の事である  
實に佛の弘法に於ける人格を親しみ深く、知らんこと  
ることは適當な諸種の立場から諸經文を分類配列し、  
そのままに表さんとしたる本書の說法篇を讀む事に於  
て可能であらう。併し乍ら正覺實現の實踐的 capability、  
其意義及成道釋尊の人格的背景を釋尊自身の先驗的意  
味の法界に求めることは藝術的表出を措いて不可能で  
ある。此の點を明に表現するものは殊に大乘諸經典に  
多く見出さるる佛の過去世に於ける記錄でなくてはな  
らぬ。而して正しく本書に於ける本行篇が幾分かそれ  
等諸經典より抄録し以て佛陀の過去世の因果を表して  
居るのは宜なる哉であらう。

要するに、神經質的な繁激な現代に於いて、殊に震  
災後の何ものかを捉へんとする現代人にこつて、偉大  
なる人格たる釋尊の聲咳の諸斷片を、讀者の眼に因つ  
て佛陀の人格を把へ得るやうに、而も興味多く厭意を  
覺えずに讀過し得られるやうに、編著されたる佛傳こ  
そ博士の「佛傳集成」であらう。價四圓、東京丙午出版  
社發行(T. S. 生)

古本漢語燈錄

中外出版社編輯部

漢語燈錄は和語燈錄と共に、法然聖人全集とも云ふ可きもので、文永年間に鎮西の望西樓了慧の纂輯したものである。後、それを校訂して、正徳元年に鎮西の義山が開版せるものを、底本として従來、淨土宗及び眞宗の學徒は用ひて來たことである。

而かるに、遠く既に、玄智の「淨土眞宗教典志」に記せる如く、義山と殆んど同時代なるわが大谷派初代講師慧空の書寫せる漢語燈錄なるものがあつて、義山以前の諸書に引用せる漢語燈錄の諸文は、多く慧空師書寫本に一致すれども、義山本と相違する所多く、中にも、七箇條起請文の如き、その本文と義山本のそれとは頗る相違せる文句が多く存せるよりして、義山のそれは元祖の眞本に多くの加筆及び删除を施したものとせられ、數年前より、宗學者間に慧空師書寫の眞本漢語燈錄の刊行を企てられつゝも、尙その實現を見なかつたが、はからずも今度、それを、「古本漢語燈錄」と名付け、中外出版の「佛教古典叢書」の一として刊行されたのである。元祖研究者並に宗學者の、ひたしく、待ちに待つた刊行であるのである。

「古本漢語燈錄」は、その巻尾に、宗教大學の教授、今岡達音氏の「解説」が添へられてある。それによるこ氏が去る大正六年に東京本郷街集古堂書店に於いて、

該古本を手に入れ、一時謄寫して頒布しやうとしたが中外出版會社に委託して、出版することになつたといふことである。

解説を一讀するに、後部の梗概叙説は親切であつて漢語燈錄を初めて手にするものには便宜の解説であるが、その前部に於いて、玄智の「眞宗教典志」を破しつつ、義山を救つてゐる點は、首肯し難き點がある。されど、義山のそれに改刪訂正の跡の存するに對して古本漢語燈錄が、元祖の眞本に近きものが明らかになつた今日、鎮西の義山と眞宗の玄智との是非は、もはや問題ではなくて、今まで、僅かに寫本として傳へられて來た、わが慧空師書寫の古本漢語燈錄がこゝに刊行せられ、何んにも、傳持者の主觀の雜らない、元祖の眞本によつて、直接その原意に接し得ることになつたことは、こよないよろこひである。(和裝半紙版二九七頁・價三・五〇、中外出版社發行)(悟)

Ārya-Manjūśrī-Mūlakaṇḍa, Edited by Mahāma  
hopādhyaya T. Garapati Sastri.

宋天息災譯文殊儀軌即ち大方廣菩薩藏文殊師利根本儀軌經に相當する梵本で西紀一九〇三年 Pāṇinīyapāṇi 附近から蒐集された梵語寫本中に發見せられ、一九二〇年以降 Tri-ta-crum Skt. Series として之を數卷

に分ちて逐次上梓されたもの。その底本たる貝葉は刊行者の考證に依れば三百年乃至四百年前の書寫に屬しその筆者に就いてはその奥書に

Sri Mādhyaśa-vihāradhipatimā……Madhyadesat Vinirgate Paṇḍita Ravi'andra Iktimam, があるが、この Paṇḍita Ravi'andra の本名は詳かでない。元來漢譯佛典中には密教及密教關係の經軌頗る多く、誠に廣漠雜多その教理が特殊的なる上に校訂不完全と來てゐるから、全く南天鐵塔でも聞くような勇猛度量の大阿闍梨でなければ到底讀むことは出來まい。所謂帶迷因人がこれ等を諒解するためには宛も東密家等が奥疏に於ける如き米會爛脫と云ふやうな十二口傳でも設けてかゝらねば會通することすら出來ない狀態である。かくては密教の宗教的宣傳にも多大の支障であるは勿論、我等學的研究上にも甚だしき牆壁となるものではある。だから現在では是非共諸密教經軌——特に金剛頂部及雜密經軌の如き梵藏等の原本からして譯者の誤謬或は辭句の錯誤等を整訂するのが最も急務であると思ふ。この意味に於て稀代の本書なごはそが好箇の資料たるを辭せないであらう。今本書を披くに、最初の部分なごは佛菩薩、緣覺、聲聞明王天等の別名であつて多少冗長の感がないでもないが、猶ほこれをばブラーナ等に出

づる諸神と比較すれば興味定めて多かるべく、特に一經の結構はかの文殊師利千臂千鉢經等と同一轍で、既にこの別名 “Bodhisattva-Pitakatamsaka” が詮す如く華嚴と密教思想との擧揚と見らるゝ處多く、勿論既成眞言教學から見れば單に應化身顯教雜說の雜密經典たるに過ぎぬであらうが、苟くも嚴正批判の下、恆に華嚴部經典と密教經典との發生肉內的脉絡を究めんとする教理史研究者にはこれ亦無價の好羞である。且又すべての原典學に於てもさうであらうが特に先きに言ふ如く比較的校訂が充分でない密典に於ては梵漢對照して行く中には漢譯經典の文字なごの誤りも訂正さるゝてふ——例へば成九二十六右五行の妙實は妙寶 *Sarva* である如き——些々たることではあるが副産的成果をも生ずるに至ると思ふ。

遮莫本書の發見及出版の如きは明に學界の慶事であり既に Ganapati 氏も “This is a holy work of the Buddhists and deserves to be placed along with the Veda” と云ふてをらるゝように梵語學は固よりテキストロシーに於て佛教々學史研究に於て、はた密教研覈上に於て最も價値ある本書を得て茲に吾人はこれを全寫して “Parisamāptam cha yatha-lakṣanāya-Majjīriyasa kalpaṃ” 後世に遺したる Paṇḍita Ravi'andra 某氏及びこの上梓者 T.

Ganapati Sastri 氏に對し、星霜遠く隔たりたる今日、杳かなる日東の天地より滿腔の感謝を捧けて止まない。  
(藤井周)

# 最近佛教研究論文一覽 (大正十二年)

## (A) 原典

- 善導大師本具兩疏弘傳考 藤原 猶雪 史學雜誌 三〇ノ十二
- 立正安國論抄出略註 小林 一郎 法華 一〇ノ二二三
- 式文第三段下の一問題 松陰 了諦 龍大論叢 三三
- Buddhavarṇana-Kaṭṭha, Saṅgītiyaṇṇa-Kaṭṭha, Sasanavamsa-Kaṭṭha, Rajavamsa Kaṭṭha-Chāṭam. (Burmese)(J. B. R. Society, Vol. XI, Part III.)
- The Abhidhamma-Piṭaka and commentaries, By C. A. F. Rhys Davids. (R. A. S., April, 1923.)

## (B) 教理及教理史

- 無我論 手島 文倉 哲學研究 八ノ一〇二
- 攝取不捨 金子 大榮 成同 六ノ二
- 五位傳承史 岡田 宣法 同
- 大品般若經の方便思想 佐藤 泰舜 同
- 大乘菩薩道と無我思想 佐々木月樵 宗教と思想 一ノ二
- 他力經濟の宗教 齋藤 唯信 教化 三
- 内省の軌範としての三々法門大須賀秀道 同 三
- 念佛道の顯現まで 可西 大秀 同 三

- 佛は何處に實在するか 馬田 行啓 法華 二〇ノ二
- 信心威佛論 北尾 圓大 同 一〇ノ三
- 小乘戒より大乘戒へ 松本文三郎 龍大論叢 二五
- 眞門行論 小山 法城 同 二五
- 智者思想の教史一般 梅田 龍月 獻山宗教 四ノ三
- 支那佛教概説問題に就いて常盤博士に對ふ

- 上座末派の教義 久保田量遠 無礙光 二九ノ〇
- 印度神變派の組織 高井 觀海 密宗學報 一三ノ三
- 印度の淨土教 長谷部隆諦 同 三三
- 舟橋 水哉 同 二三
- 金剛頂宗と世親學派との關係中井 自朗 同 二五
- 道邃和尚の學說に就いて 熊田 龍雄 同 二五
- 空の教義に關する一考察 赤沼 智善 合掌 四ノ二
- 獻山の圓戒と永平の禪戒 清水 梁山 第一義 二五ノ八九合
- 海印三昧の基礎的意義 青木 正音 同 二五
- 日本佛教の本質と親鸞の哲學鷲尾 順敬 宗教と思想 一ノ二
- Hinayanism and Mahayanism. by Shwe Zan Aung. (J. B. R. S. Vol. XII. Part I.)

## (C) 教會史

- 山陰に於ける曹洞宗史料 稻村 坦元 第一義 二七ノ八九合
- 法華會廣學堅義起原沿革の概要 菊岡 默嘯 獻山宗教 四ノ一〇
- Kaṭṭiya Claus in Buddhist India, by Bimala Cha an Law, (J. B. R. S. Vol. XII. Part I.)